

5.1. 「張り合い」と言う事

(一九九八年一月「実業の富山」新春随想)

私の職場に「日新月新又年新」の字が掛けてある。拙い自書だが気に入っている。勿論、「日新日々新又日新」(大学)が原典である。「日々に月々に年々に新たなり」が最近の私の座右銘である。そして、今年の賀状には「日新」の字を入れた。

「張り合いの持てる人生は素晴らしく、ありがたいことだと思います。仕事であれ、趣味であれ、人であれ、。」 昨年、知人宛への誕生カードに書いた言葉である。「張り合い」とは何か。どんな境遇にあるにしる、それがあから努力の活力が出る、向上心が生ずる、希望が持てる、人生に喜びを感じずる、そんなものではなかろうか。人それぞれで形は違いただろう。違いただろうが、「張り合いの持てる人生は素晴らしく、ありがたい」、心からそう思う。そして今の私に「張り合い」がある事が嬉しい。

三年前からウィーンの国際原子力機関 IAEA で「真水」の仕事に携わっている。原子力機関で「水」とは奇異に響くかも知れない。それは「水」の問題に原子力が貢献できるかと言う取り組みであり、私が日本の原子力開発の中で育ったからで、人類全体の身近な問題に国連機関の場で経験が生かせることに張り合いを感じるのである。

日本では一人平均毎日約五〇〇リットルの真水を生活に使う。世界の水事情からは日本は例外的ですらある。ウィーンではその半分、多くの地域でそれ以下、しかも低質の水である。公務で訪ねた中東の砂漠国や旧ソ連カザクスタンでの一人当たり「真水」消費量は日本の約十分の一である。真水使用量の伸び率は人口増を上回る。今世紀、人の平均寿命は大幅に伸びた。医療技術以前に真水の回収技術、供給技術改善に負う処大と言う。開発途上国の真水確保は国連挙げての緊急課題になっている。今世紀は油の取り合い、来世紀は「水」が紛争の種だとの見方もある。無尽蔵の海水から真水を回収する淡水化技術は今世紀半ば実用化され、今ではアラビヤ諸国を中心に定着し、必要とする地域はアフリカ、アジア、南米に急速に広がっている。その海水淡水化にエネルギー源の立場から原子力が如何に貢献できるかと言う訳である。

ウィーンは言うまでもなく音楽の都であり、葡萄酒の街である。今こそ、オーストリアは人口約八百万の中小国級だが、政経宗芸学、あらゆる面で世界の中心であった旧ハプスブルク家以来の物心両面の資産は「効率主義」に偏りがちな我々には羨望を通り越して正に「脱帽」の感である。通りや広場に政治家・軍人の名はない。王族と芸術家の名を身近に配して飽きない風土に平和と心の豊かさを物より尊ぶ国民性を実感する。加えて、私の好きな山がある。ウィーンの森からヨーロッパアルプスに至る山々である。心を落ちつけて呉れる美しく緑豊かな山が至る処にある。ハイキングクラブ仲間と出かける山が、望郷感を忘れさせて呉れる。そんな環境で仕事をさせて貰え、趣味に興じ、人を想える今が最高の「張り合い」かと思う。

私は人生前半を高度経済成長時代に育った。張り合いは多くの仲間同様、学問・仕事上の業績だった。「頑張る」が誰ものモットーであり、激励の決まり文句だった。挫折した中年の一時期は正に張り合いを見失った時だった。「頑張る、頑張れ」と言う言葉が自分にも他人にも使えなくなり、「張り合い」「充実」と言う言葉に代わった。人生自体にこれが張り合いかと感じた時は既に「知命」だった。今、遅ればせながら「人に尽くす事、人を喜ばす事」に張り合いを感じ得るようになってきた。昨年、事務局長を務めた国際シンポジウム終了後大会関係者の満足感を目にし、他人に満足感を与え得た事に自分自身の達成感以上に感動し、嬉しかった。

「張り合い」のある生活、持てる人生は素晴らしいと思う。仕事であれ、趣味であれ、人であれ。家族、友人、知人。人との出会いこそ素晴らしかったと思う。頭髪の気になるこの年齢になって漸く「不惑」なのかと思う。「張り合い」の中で私は今幸せである。